

二松学舎大学附属図書館

季報

2008(平成20)年3月

『卅六歌仙』



私の研究と図書館 菅原淳子 ②

涼風の静嘉堂文庫 山崎正伸 ③

図書館と本屋と私と…… 土屋茂 ④

学者の蔵書印三種 田村和親 ⑤

横溝正史旧蔵資料紹介 ⑥

本学教員著書一覧 ⑦

自力と他力と—図書館という場 久米晋平 ⑧

大学資料展示室案内

No. 68

私の研究と図書館

附属図書館長 菅原 淳子

大学に入学して以来、大学院、助手、研究員を経て本学に着任するまでの約20年間、私の研究生活の主たる拠点は母校津田塾であった。なかでも図書館は学部生のころから授業の予習や宿題、レポート作成の場として、大学院生時代は落ち着いて研究資料を読む場所としてずいぶん利用したものである。図書館は小ぶりな四階建ての建物で、閲覧席は一階にあり、8人がけの木製の大きな机が並んでいた。建物の南側はテラスになっており、ガラスの向こうにはきれいに刈り込まれた芝生が広がっていた。私はよくテラス側の一番奥の机に座った。読書に疲れてふと目を上げると、緑の芝生や遠くの玉川上水のこんもりとした林が目に入ってくる。母校の図書館は今でも懐かしい、居心地の良い空間であった。

研究の場として利用していたが、図書館に十分な研究資料が備わっていたかという点、決してそうではなかった。国際という名のつく学科としては国内で初めて開設された母校の国際関係学科であったが、学問としての国際関係の方法論はまだ模索されていた時代であり、蔵書も十分ではなかった。地域研究に重点が置かれ、欧米やソ連など諸外国で出版された文献の収集も進んでいたが、助手時代、私の仕事の一つは、地域研究や国際関係、国際政治などの基本的文献を選書することであった。

国際関係の中でバルカンの近現代を位置付けるという私の研究テーマは、学部以来のものであるが、東欧・バルカンへの関心の原点はじつはロシア文学、ロシア語への興味にあった。中学・高校時代に外国文学、なかでもロシア文学に惹かれ、トルストイ、ドストエフスキー、ショーロホフなど傾向の異なる作家の作品を読み漁っていた。大学に入って第二外国語を選択する時は、ロシア文学を原語で読みたいという気持ちから、躊躇することなくロシア語を選んだのである。その後関心は次第にソ連・東欧の歴史や政治に移り、学部3年では東欧を専門とする先生のゼミに所属することになった。当時は日本語で読める東欧・バルカン関係の文献が限られていたため、私は英語で書かれたバルカン史の概説書を読みながら研究のテーマを探ることになった。そのような折、図書館で偶然見つけたのが、ブルガリア語から翻訳されたばかりのヴァーゾフの小説『軛

の下で』（恒文社、東欧の文学2,1973年）であった。500年に及んだオスマン帝国支配からの独立運動を扱ったこの小説は、作者自らが運動の闘士だったこともあり私を夢中にさせたのである。その後岩波文庫で読んだツルゲーネフの『その前夜』も、同時代のブルガリア人革命家を主人公とした作品であった。こうして私の研究テーマは、『東方問題』と呼ばれる19世紀後半のヨーロッパ国際政治とバルカン諸民族の独立運動、国家建設の関係性に収斂していくことになった。

1970年代中ごろになると、東欧への留学や現地での研究が可能になり、それまで欧米やソ連の研究に依拠していた日本の東欧研究も、東欧各国の資料や文献を駆使した独自の研究へと発展し始めていた。1980年、ついに私もブルガリア科学アカデミーの招待で、半年間の現地研究の機会を得ることになった。ブルガリアでは、ほぼ毎日、科学アカデミーや歴史学研究所の図書室に通った。どちらも30人も座れば満席になってしまうような、まさに「図書室」であった。資料の持ち出しは禁止されており、当時はコピーの機械もなかったため、私は借り出した資料をひたすら書き写したのである。不便なことも多かったが、ブルガリア語の資料に囲まれていたこの半年間は、研究者としてはとても幸せであった。

このたび本年3月31日をもって図書館長を退任することになりました。若輩の私を補佐して下さった部課長以下、図書館スタッフの協力のおかげで、無事2年間をつとめることができました。法人のご理解で柏の保管書庫の設置や九段図書館の閲覧席の拡充が実現し、地域への開放や他大学図書館との連携も進展いたしました。利用者の視点に立った、利用者のニーズに応える図書館として改善すべき点はまだまだありますが、それは次期館長にお任せいたします。今後とも図書館運営へ皆様のご協力、ご理解をお願い申し上げます。

涼風の静嘉堂文庫

文学部教授 山崎 正伸

初めて、静嘉堂文庫を訪れたのは、昭和45(1970)年の夏、大学二年の夏休みだった。前年の春に古文書研究会を立ち上げることになって、ご指導いただいていた大谷光男先生から、米山寅太郎先生宛に裏に紹介を書いていた名刺を持って、二子玉川園からアスファルトの照り返しの暑い道を歩いた。かなり歩いて石の門柱に「静嘉堂文庫」という看板を見つけたときは、やっと着いたとほっとした。ところが、静嘉堂文庫らしき建物は見えなかった。門の先には、鬱蒼と茂った木立と右手に登る細い道が見えるのみであった。しかし、一步門柱を越えて足を踏み入ると、川のせせらぎ音、熊笹を渡る風、砂利道、そこはまるで別世界への入り口だった。辿り着いた丘の上の古い建物、きしむドアを開けて入って感じた懐かしい香り。名刺を差し出して平仲物語を見せてくださいとお願いした。住所と氏名と二松學舎大学二年と書いたら、ほう、二年生、出してくるから閲覧室で待ちなさい、と言われて入った閲覧室は、油引きの床、古い机と椅子、何を見ても驚くばかりであった。暫くして、伝冷泉為相筆平仲物語を持ってこられ、利用の仕方についてご指導を受けて、初めて和本を手にとった。心躍るばかりで、夢見心地というのはこのような思いなのかと思った。萩谷朴先生の角川文庫平中物語を手にとり十日間ほど通って、翻刻をした。嬉しくて嬉しくて、とうとう写真版が欲しくなって、マイクロの青焼き希望願いを書いた。数日して電話があった。親切に色々お話を下さって、とても高い金額になるから、武蔵野書院の影印本にしなさいとのことであった。

何度読んでも意味が取りにくいところが所々あった。そのことを、故山田清市先生にお話ししたら、字母に直してみてもらなさい、変体かなの使い方で類推できることがありますよ、と教えていただいた。

翌年の夏休みは、井上文雄の冠註大和物語三冊の翻刻に通った。朝、涼しいうちに出かけて、夕方まで、ノートに鉛筆で翻刻し、帰宅して万年筆で清書をする毎日、しかし、閲覧室に入ってくる風は、涼しく優しく、そんな経験もないにもかかわらず、まるで軽井沢の別荘に避暑に来ているのではと、そんな勘違いの夢をいだけつつ、ひたすら翻刻をして、夏休みが終わった。

後年、大学に勤めて、一年生の文学散歩を担当するようになって、静嘉堂文庫・国文学研究資料館・神田古書店街というコースを作った。何年かして、平成3(1992)年の春、学生の希望で、静嘉堂で平仲物語を出していただいた。違うような気がして、昔話をしたところ、今はこの複製本の閲覧のみになっていて、もしかしたら、昔、見せていただいたのが、最後の実物の自由な閲覧だったのではという話になった。どんな経緯でそのような僥倖を得たのかは分からないが、感謝するばかりであった。

そして、平成10(1998)年から3年ほど、実践女子大学文芸資料研究所にお世話になった。その折、黒川真道書写の平仲物語に出会った。奥書に、「明治廿七年十二月九日岩崎氏蔵本冷泉為相卿真跡本四半本双紙綴書写畢黒川真道」とあり、その脇に朱で、「同三十六年十二月一読了真道」とあった。本文の一部に空欄があり、後に、朱筆が入っていて、真道も読解に苦しんだのだと1丁1丁めぐりながら思った。静嘉堂に蔵書されている平仲物語は山岸徳平氏と川瀬一馬氏によって昭和元年(1926)に見出されたというが、その前に、こうして書写されていたのだと思いながら、丁をめぐった。そして、静嘉堂の平仲物語を、窓から入って来た涼しく優しい風を、思い出した。



図書館と本屋と私と……

国際政治経済学部教授 土屋 茂

私は図書館・本の山が好きである。自然の山と同じ様に本があるとホッとする。山は生命の源の一つである。人間は山の恩恵を受けて生きている。たとえば、春になればタラの芽やワラビ、秋になればキノコやアケビ等を受け取ることができ、夏はハイキング、冬はスキー等山にとけこみ、山(特に森林)のおかげで生きることができる。水も同様であり、山が豊かであれば沿岸の漁業も豊かになる。図書館も同じ役割を果たしていると思っている。図書館から様々な情報を得ることによって生きることに関与している。最近九段キャンパスの図書館にも行くことが多くなって来たが、それでも柏キャンパスの図書館の方がその機会が多い。入館すると新たに購入された図書・雑誌をまずチェックする。次いでパソコンを使用することができないので、昔ながらの手法で資料を調べることになる。目当ての文献を見つけることができればよし。さらにその過程で予期しなかった論文等を見い出せればさらに良い。この作業が何とも楽しい。これらの文献を拡大コピーすることになるが、問題はここである。コピーした資料を読み研究・教育に役立てれば良いのであるが、諸事情により本と同様に積んどくケースが増えている。誠に残念である。130年の歴史を背負っている図書館には、文学関係の書物は数多くあるが、法律関係の資料は少ない。それでも国際政治経済学部創設の頃に比べればかなり増えたのであるが。ここで見つからなければ、他大学の図書館等に頼ることになる。私にとって図書館は山と同じである。故に好きになる。

町の本屋さんを尋ねることも楽しみの一つである。柏駅周辺では、三軒の本屋を見て回る。買わなくてもストレスの解消になる。さらに神田の古本屋街は効果が増す。九段キャンパスと御茶の水駅の間をよく歩く。時には水道橋駅近くまで行く。探し物は、法律書が中心となる。古本屋(古物商)でありながら法律関係の新刊本をほとんど置き、しかもそれらを一割引で販売している店が水道橋駅近くにある。また、少量ではあるが、新刊本を二割～三割引で置いてある店が三省堂と書泉の間に存在している。したがって、欲しい法律書があると、まず御茶の水駅から坂を下り三割引きの店に寄り、ないことを確認してから水道橋駅近くの古本屋に行くことが基本パターンとなっている。もっ

とも即時に必要な本でなければ、一割引の店で現物を確認し、柏キャンパス内の本屋に注文することになることが多い。長年神田の本屋街を目的もなしに歩き回ると色々なことを発見する。マンガ専門店や文芸書を一割引で販売している古本屋さらには月曜日売り出し予定の雑誌を二日前の土曜日の昼過ぎに店頭には置いている店も存在している。

あなたの趣味は何かと聞かれることがある。色々な趣味を挙げることになるが、その中に読書という項目もある。質問はそこで止まるのであれば良いが、続けて、どんな本を読みますかと問われると、一歩下がることもある。それは読書範囲がかたよっているからである。小中学生の頃から本を読むことは大好きであったが、文学少年ではなかった。関心は主に歴史物語にあった。何故事件が起きたのか、その影響はどうであったか、知ることが楽しみであった。対象となる歴史は徐々に拡大し、遠い過去に及び将来に広がっていった。生まれ育った長野県諏訪地方は、縄文時代中期の最盛期に該る地域である。山の斜面にある畑の中には土器の破片や矢尻が数多くあり集めることができた。また葉の化石が採れる場所もあった。これらの事を通じてはるかな過去や遠い未来にも興味を持つようになっていった。今でもこの傾向は変わっていない。SF的要素と歴史的要素がミックスした物語には全く目がなくなる程夢中になってしまう。

過去の失敗から、図書館に購入を依頼する本であっても同じ本をできるかぎり買うことにしている。したがって本の購入代金、すなわち研究者としてのエンゲル係数は非常に高くなっている。増税・物価上昇の現在、収入が増えないかぎり、生活防衛上この係数を下げざるを得ないことになる。今一番頭の痛い問題である。そこで図書館の重要度が益々高まってくる。

学者の蔵書印三種

文学部教授 田村 和親

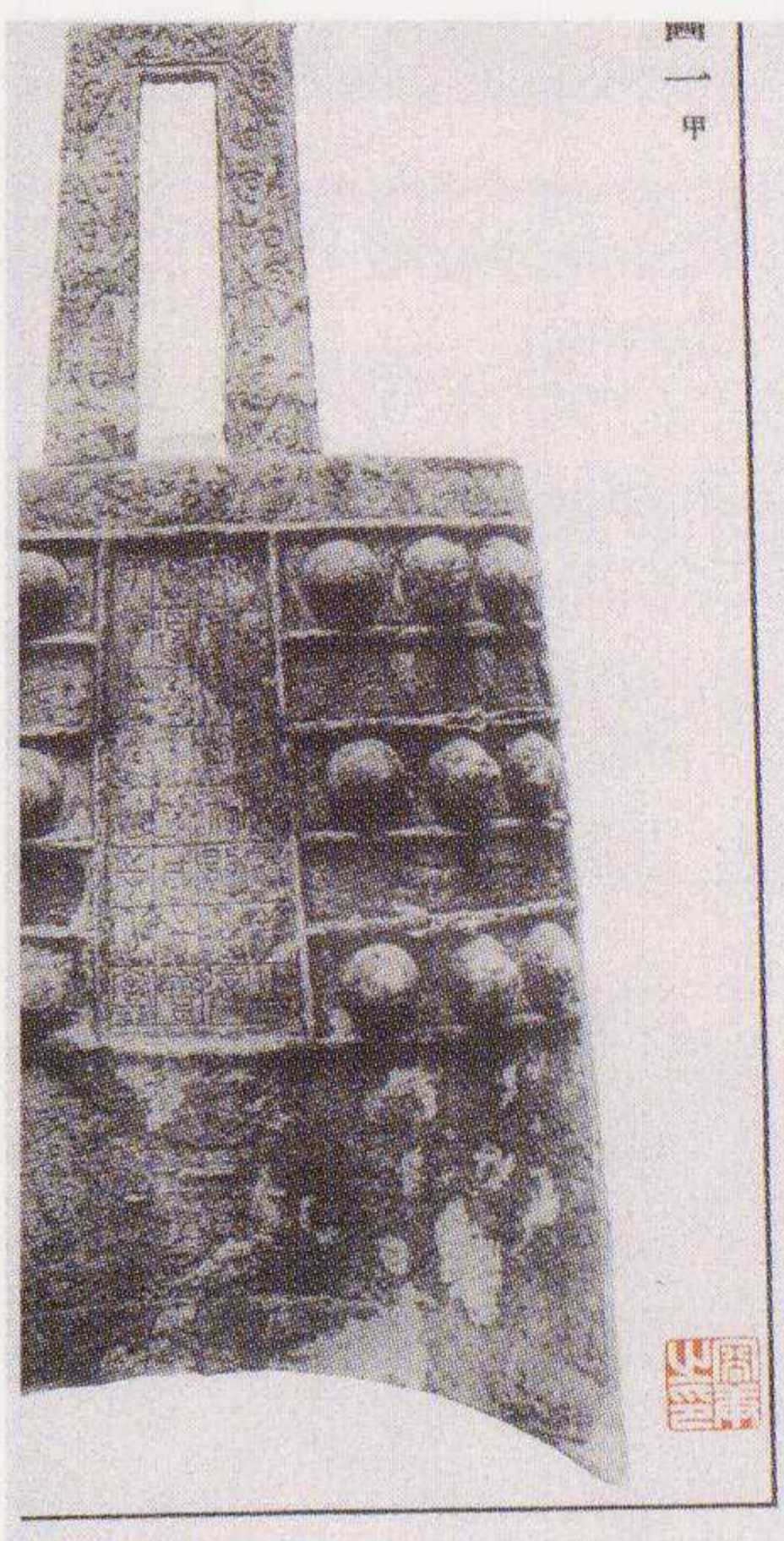
いわゆる「書家の書」に別って「学者の書」、という呼び方がある。学者の書は、書家の書のような技巧はないが、一家の学を成した者の、奥深い学識が風格となって現れ、独特の風韻を帯びる。

これら真の意味での学者は、また、蔵書家でもある。価値ある書物が、学識によって選出され、蓄積されて体系をもった一つの文庫が形作られるのである。書物は、学問の資料であるが、彼らには、単なる「道具」としての意識はない。収集した書物に敬虔な態度を以て接する。書物自体に敬意が込められるのである。そこで、いったん収蔵するに当たっては、これに蔵書印を捺し、愛蔵した。学者の蔵書印は、いたずらに風流や洒脱さを衒わず、また所蔵を誇っていない。あるいは謙虚につつましく、あるいは端正に、所蔵者の好みや人格がただよって、まことに味わい深い。

ここでは図書館所蔵のうちから、清朝から民国初にかけての蔵書印三種を取り上げよう。

下は容庚旧蔵『鳳氏編鐘図釋』（徐中舒 撰 民国二十一年 国立中央研究院歴史語言研究所 景排印本）である。「容庚之印」。この書物は、大本であるが、容庚は、小印を第一丁表の右下の欄内に置いた。モノクロの印刷に朱の印泥の色が美しい。

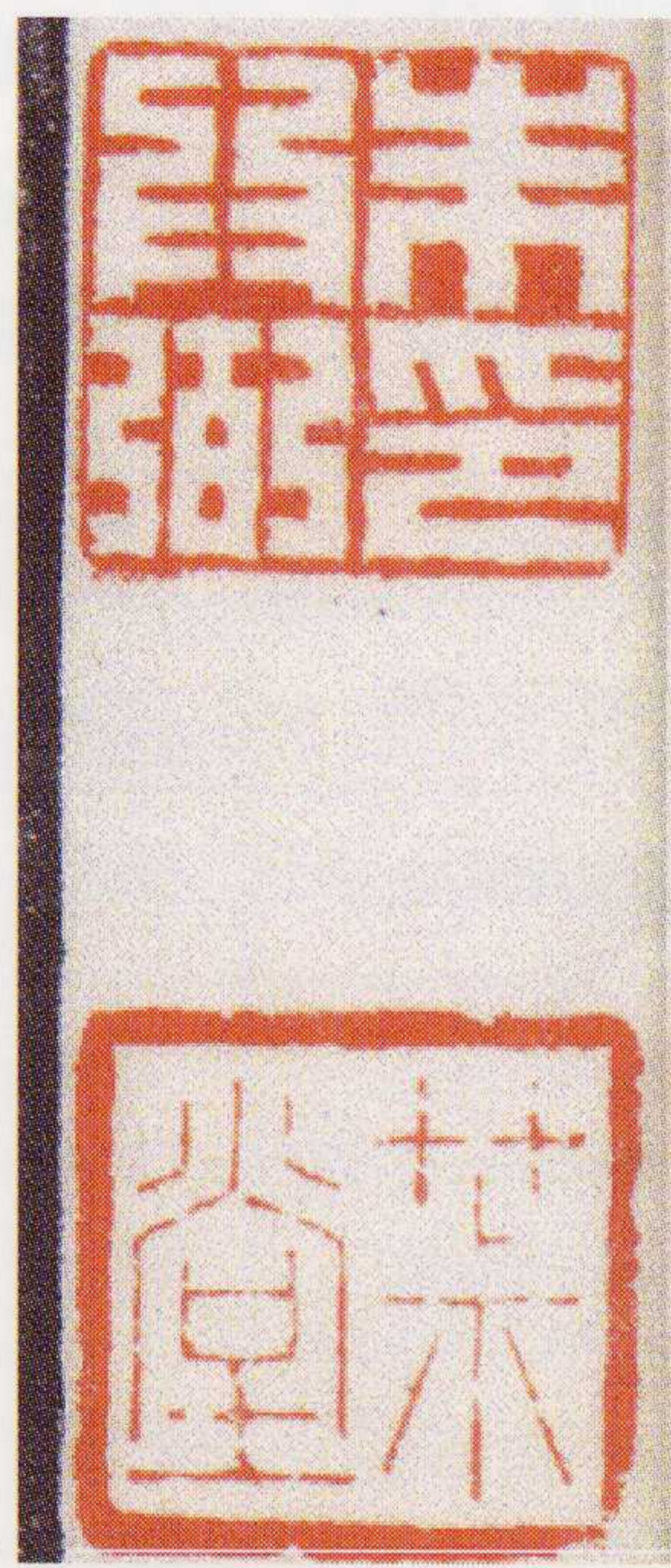
私蔵印は、第一丁右下に本文半行にかけするのが正法であるが、示したように、ここでは敢えて図にかけていない。



容庚、字は希白、頌齋と号した。羅振玉に師事し、古文字学を修めた。同門の王国維の学を発展させ、『金文編』正統・『商周彝器通考』など、金文学の根幹を築いた。王国維旧蔵の印（私蔵）も同様に小印を用い、本文にかけていない。あるいは、この



学派に共通するものであるかもしれない。所蔵を強調せず、本文を損なわないつつましい態度が、かえって気品を醸し出している。



左は、朱為弼旧蔵『建昭鴈足証考』（清徐渭仁 撰 道光十七年 上海徐氏刊本）

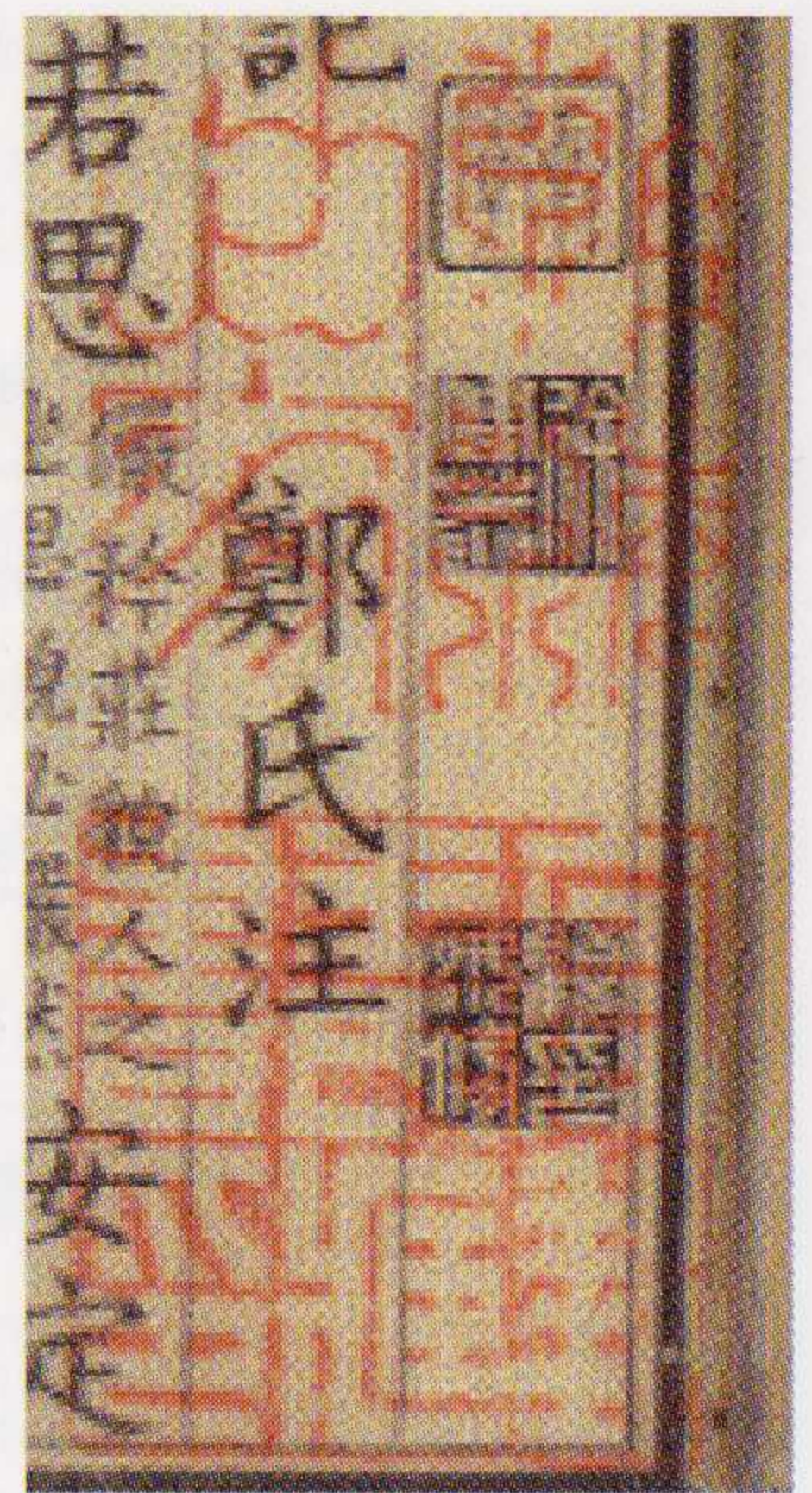
朱為弼は、大儒、阮元麾下にあって『積古齋鐘鼎彝器款識』や『経籍叢詁』などの編纂に従った有数の知識人である。また、鄧石如以後の篆書の名手として名が高い。印は、一丁右下の欄外にあり、「朱為弼印」「茶(椒)堂」。紙数の関係で半丁全影を出せないが、書に通じた者としての、印の配置が絶妙である。

右は王念孫・王引之父子旧蔵、撫本『礼記』（清張敦仁 撰考異 嘉慶十一年 陽城張氏 用宋撫州本景刊）。『淮海世家』『高郵王氏蔵書印』

高郵王氏父子の学は清朝考証学の精華として、今日なおその学問的価値を失っていない。『広雅疏証』『経義述聞』『経伝釈詞』など、精緻な考証が高く評価されている。

蔵書印は、正法に従い、第一丁表欄内の右下に、本文にかけてある。世々の家とあるように、王氏が父祖以来収蔵してきたものの一本である。王氏一族代々の家学に供するために収蔵してきたことを意識する印であろう。この蔵書印は、名家としての一族所蔵の誇りが格調となって現れている。

そのような王一族の蔵書もやがて散じた。王念孫は、その著『広雅疏証』刊後、なお補正を続けたが、王念孫自筆の多数の箋が付された一本が羅振玉に伝わった。羅振玉は、これを整理し、『広雅疏証補正』として世に出した。今、『殷礼在斯堂叢書』に収められている。散じた名家旧蔵の書物を受け継いだ者が、どのような態度をもって接すべきか、その一端を示すエピソードとして興味深い。名家の旧蔵書を受け継いだ者は、その書物をどう保存し、かつ、次の者にどのように受け渡すのか、その力量が問われるのである。

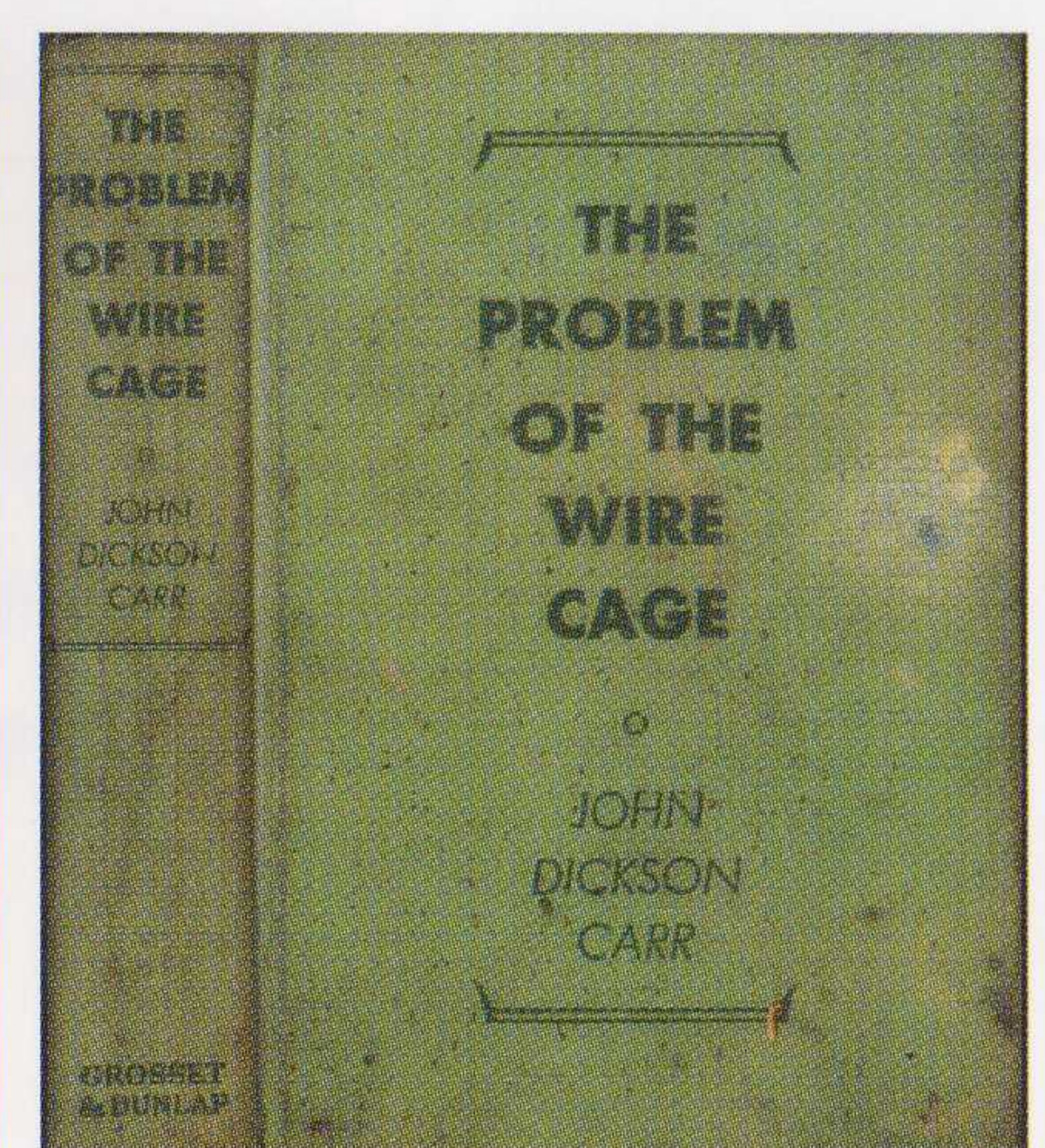
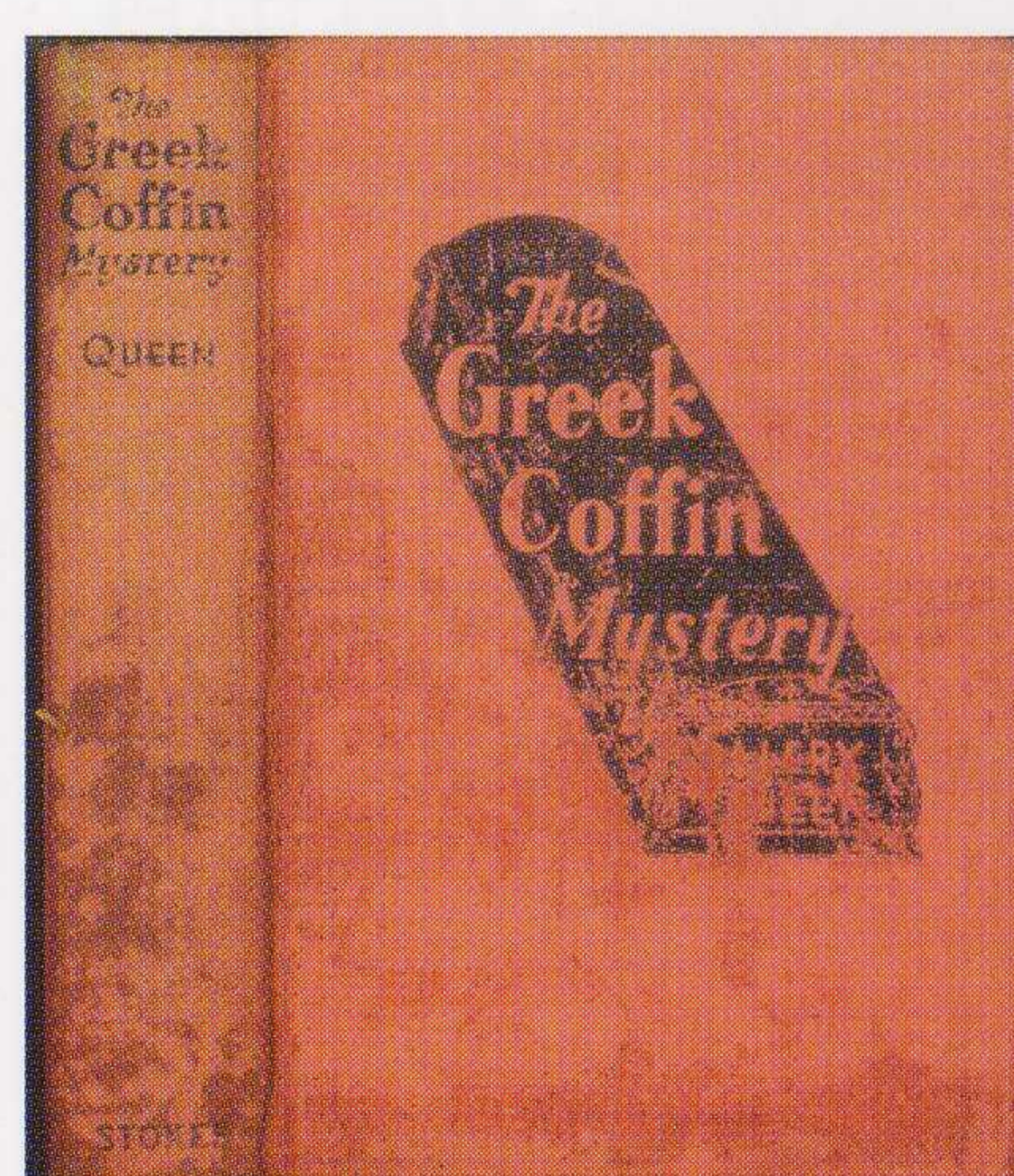
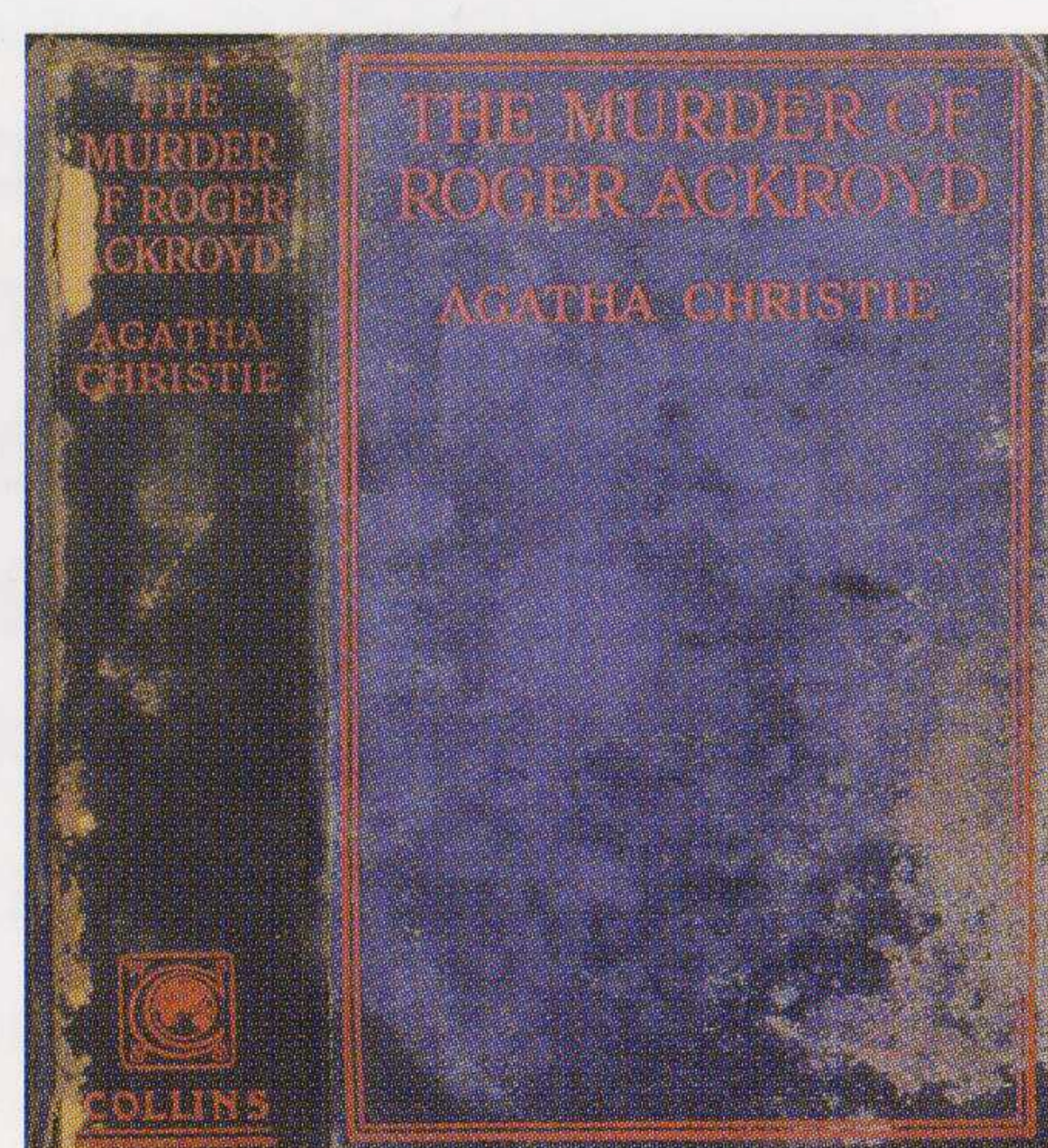
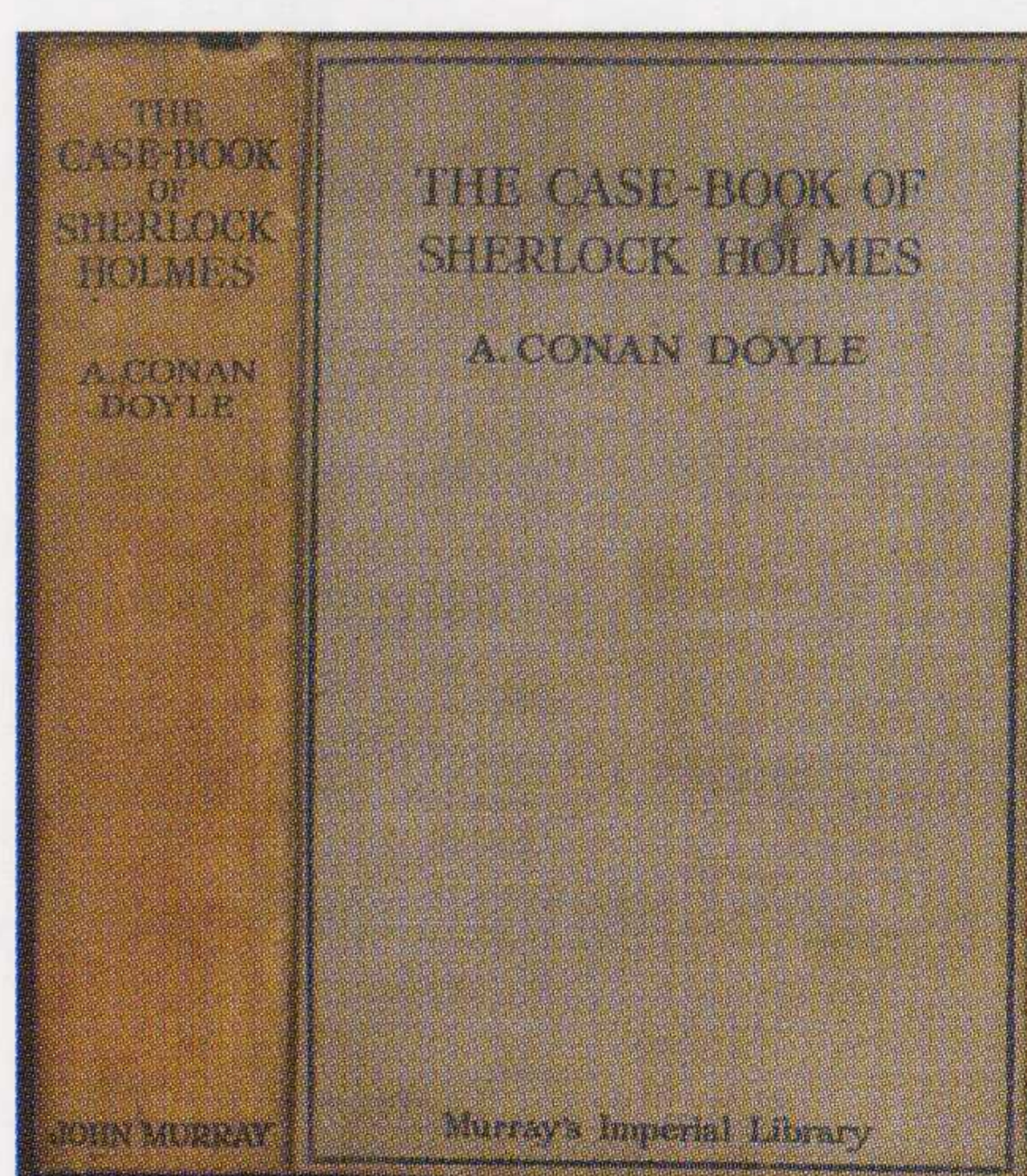


横溝正史旧蔵資料紹介

平成19年に受け入れた横溝正史旧蔵資料には、約170冊の洋書コレクションがある。その中には、特に横溝に大きな影響を与えたArthur Conan Doyle, Agatha Christie, Ellery Queen, John Dickson Carr(Carter Dickson)の本がある。ここにそのリストを掲載する。横溝は、少年時代から探偵小説に強い興味を持ち、海外の作品を読み漁った。神戸に入港する外国船の船員が手放した洋書や雑誌を熱心に買い集めたと言う。それらは、横溝が死ぬまで手元に置かれ、多くの作品を生み出す源泉となったと思われる。

なお、今後横溝正史旧蔵資料を順次紹介する予定である。

タイトル	責任表示	数量	サイズ	作成者名称	出版地	出版者	出版年
The return of Sherlock Holmes	A. Conan Doyle	208 p. (途中からない)	18.5×12.2 cm	Longmans, Green and Co.	London, Bombay	Longmans, Green and Co.	1905
Round the fire stories	A. Conan Doyle	372 p.	17.7×11.7 cm	George Bell and Sons	London	George Bell and Sons	1908
His last bow : some reminiscences of Sherlock Holmes	A. Conan Doyle	305 p.	19×13.5 cm	G. Bell and Sons	London	G. Bell and Sons	1917
The land of mist	A. Conan Doyle	287, 31 p.	16.4×11.9 cm	Bernhard Tauchnitz	Leipzig	Bernhard Tauchnitz	1926
The case-book of Sherlock Holmes	A. Conan Doyle	320, 11 p.	19.3×13.1 cm	John Murray	London	John Murray	1927
Uncle Bernac	A. Conan Doyle	255 p.	18×11.4 cm	Hodder and Stoughton	London	Hodder and Stoughton	[n. d.]
Memoirs of Sherlock Holmes	A, Conan Doyle	[6], 157 p.	21.3×14.6 cm	[George Newnes]	[London]	George Newnes	n. d.]
Round the fire stories	A. Conan Doyle	156 p.	21.2×14.5 cm	不明	[S. I.]	s. n.	n. d.]
The murder of Roger Ackroyd	Agatha Christie	312 p.	18.8×13.3 cm	W. Collins Sons	London	W. Collins Sons	c1926
Peril at end house : a Hercule Poirot mystery	Agatha Christie	240 p.	16×11 cm	Pocket Books	New York	Pocket Books	1942, c1931
Easy to kill	Agatha Christie	174 p.	16×11 cm	Pocket Books	New York	Pocket Books	1945, c1939
The French powder mystery : a problem in deduction	Ellery Queen	319 p.	18.8×13.3 cm	Victor Gollangz	London	Victor Gollangz	1930
The Greek coffin mystery	Ellery Queen	370 p.	19.1×13 cm	Frederick A. Stokes	New York	Frederick A. Stokes	c1932
Calamity town	Ellery Queen	381 p.	9.8×13.2 cm	Editions for the Armed Services	New York	Editions for the Armed Services	c1942
The four of hearts : a Ellery Queen mystery	Ellery Queen	259 p.	16×11 cm	Pocket Books	New York	Pocket Books	1943, c1938
The problem of the wire cage	John Dickson Carr	296 p.	19.5×13 cm	Grosset and Dunlap	New York	Grosset and Dunlap	c1939
The Judas windows : a Sir Henry Merrivale mystery	Carter Dickson	245 p.	16×11 cm	Pocket Books	New York	Pocket Books	1940, c1938
Death in five boxes	Carter Dickson	251 p.	18×11 cm	Penguin Books in association with William Heinemann	[S. I.]	Penguin Books	1951



本学教員著書一覧 (2006年11月1日~2007年10月31日受入分)

書名・著者名	寄贈者	所蔵館	価格(税抜)	受入日付
キリスト教の天国：聖書・文学・芸術で読む歴史 / アリストター・E・マクグラス [著]；本多峰子訳。 -- キリスト新聞社	本多峰子(内田)	柏	2400円	2006.11.14
民俗学講義：生活文化へのアプローチ / 谷口貢, 松崎憲三編著。 -- 八千代出版。	谷口貢	柏	2000円	2006.11.14
中国古代の祭祀と文学 / 牧角悦子著。 -- 創文社。 -- (中国学芸叢書；13)。	竹下(牧角)悦子	九段・柏	2800円	2006.11.27
長江 / 吉崎一衛著。 -- 明治書院。 -- (漢詩の旅；4)。	吉崎一衛	九段・柏	1800円	2006.11.27
續古事談 / 播摩光寿[ほか] 編；磯水絵[ほか] 編； 小林保治[ほか] 編；田嶋一夫[ほか] 編； 三田明弘[ほか] 編。 -- 改訂版。 -- おうふう。	磯水絵	九段	2500円	2006.11.27
高校生のための古文キーワード100 / 鈴木日出男著。 -- 筑摩書房, 2006。 -- (ちくま新書；599)。	鈴木日出男	九段	680円	2006.12.7
望岳室古文字書法論集 / 浦野俊則退職記念論文集刊行会編。 -- 萱原書房。	浦野俊則	柏	2667円	2006.12.15
江戸文学研究 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第1巻)。	竹野静雄	九段	16500円	2007.4.9
江戸文学叢説 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第2巻)。	竹野静雄	九段	11500円	2007.4.9
史話俳談 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第3巻)。	竹野静雄	九段	10000円	2007.4.9
文学史 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第4巻)。	竹野静雄	九段	14500円	2007.4.9
俳諧研究 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第5巻)。	竹野静雄	九段	9000円	2007.4.9
伝記・芸能 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第6巻)。	竹野静雄	九段	9500円	2007.4.9
ことわざ研究 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第7巻)。	竹野静雄	九段	16000円	2007.4.9
解説・解題集 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第8巻)。	竹野静雄	九段	17000円	2007.4.9
書評・序文・雑纂/国語便覧 / 藤井乙男[著]；竹野静雄編・解説。 -- [復刻版]。 -- クレス出版。 -- (藤井乙男著作集；第9巻)。	竹野静雄	九段	10000円	2007.4.9
シルクロード / 吉崎一衛著。 -- 明治書院。 -- (漢詩の旅；2)。	吉崎一衛	九段・柏	1800円	2007.4.12
佐藤進教授還暦記念中国語学論集 / 佐藤進教授還暦記念中国語学論集刊行会編；佐藤進著。 -- 好文出版。	佐藤進	九段	3800円	2007.7.3
C.S.Lewis : a christian : : objectivist- his pursuit and participation in the reality. -- 本多峰子。	本多峰子(内田)	柏	6180円	2007.7.7

自力と他力と—図書館という場

本学大学院生
久米 晋平

昨秋、柏図書館を訪ねた折、九段図書館でお世話になった図書館員の方が変わらぬ笑顔と丁寧さで利用者に対応されているのを見た。学部の頃、探しものが見当たらず、多少の緊張さを伴ってカウンターに向かったところ、直接配架場所まで案内して下さったことを思い出した。以降、図書館の利用頻度が増したの言うまでもない。

図書館という場は、利用者の自力と図書館員という他力とが発揮される場所であると思う。効率良く目的地に到達するためにパソコンでの検索結果を手控えたり、時には宛もなく背表紙を眺めるなど、まずは自力を尽すべきだが、目的の図書や雑誌が見当たらない場合には、レファレンスという、他力を頼むことになる。実際、利用者と図書館員とが接触するカウンターで得た情報によって、見落としていた図書を発見したり、視野が広がったりすることも多い。要は利用者側の一步踏み込んで相談してみる自力が必要なのである。

先日、ある席上で大学院に出講されておられる先生が「二松の図書館が好きでして……。」と話された。確か「必要な本が揃っている」を、その理由に挙げられたと記憶している。ここで言う「必要な本」の充実度とは、言い換えれば、代々の図書館員、利用者双方の足跡である。自らの研究テーマに迫ってゆく過程では、扱う図書・資料は増え続けるものだが、図書の購入希望や、他大学・研究機関への資料閲覧の申請など、図書館員による他力もまた必要なのである。

現在まで、九段図書館は座席や文庫・新書、さらには掲示物が増え、開館時間(授業期間中)が延長されるなど、次々と改善がなされてきたようだ。それらを体感するにはまずは来館することだが、やはりカウンターこそ図書館を映す鏡であることを強調したい。ここでのやり取りが利用者へのサポートになるはずだからである。

閲覧室の窓から

▼本号では、図書館や本との関わりについて、3月で退任する菅原淳子館長、及び山崎正伸・土屋茂・田村和親の3先生、また、利用者の立場から院生の久米晋平氏に、それぞれ執筆願った。お礼申し上げます。▼3月・4月は卒業・入学・進級学生への対応で、図書館は大忙しとなる。この「季報」が発行される頃は、九段校舎近くの千鳥ヶ淵・靖国神社の桜が満開を迎え、卒業生を送り出す。柏校舎の桜は、少し遅れるが入学式の頃には満開となり、新入生を迎える。▼新たな気持ちになる年度末である。「季報」第68号をお届けします。(北)

大学資料展示室 案内

平成20年大学資料展示室企画展開催案内(予定)

本年から大学資料展示室では、月替りで企画展を開催することになりました。

開催期間は月の第2週～第4週を予定しています。

詳しくは大学のホームページでお知らせします。

- 3月 漢籍の世界(3月12日～4月6日開催)
- 4月 創業者・三島中洲の世界
- 5月 近代作家の世界
- 6月 横溝正史の世界
- 7月 水木かおるの世界
- 8月 目で見ると二松学舎大学の世界
- 9月 拓本の世界
- 10月 橘守部の世界
- 11月 書簡の世界
- 12月 特殊文庫の世界(維軒文庫)

表紙資料解説

『卅六歌仙』

伝嵯峨本。元和寛永中刊。1冊。縦35.0糎、横24.7糎。柿本人麿からはじまり、女性中務内侍に至る36人の歌人を描き、上にその和歌を記している。アンリ・ヴェヴェール旧蔵。

二松学舎大学附属図書館
季報
第68号

発行日 平成20(2008)年3月20日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話:03-3263-6364

柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話:04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話:03-5614-2515